

日本のお化け屋敷

日本のお化け屋敷が中国に上陸した。セット一式を日本でつくり、船でそのまま持ち込んだ百パーセント日本仕様だ。私も実際に体験し、メード・イン・ジャパンの恐怖をたっぷり味わわせてもらった。「カワイイ」に続いて日本の「コワイ」文化は、果たして中国人に受け入れられるのだろうか？ (上海・浅井正智)

中国人「コワイ」!?

上海随一の観光エリア、外灘(バンド)の近くで、先月半ばから開いているお化け屋敷。来場者の絶叫が外まで響いてくる。

「お母さん、怖かった!」。天津から家族と旅行に来ていた小学四年の王子嘉さん(こは、一人で挑戦したお化け屋敷から出てくるなり、母親にしがみついた。セットの日本家屋は真つ暗だ。わずかな光を頼りに、狭い通路を恐る恐る進

むと、前から血だらけのお化け物が叫びながら襲いかかってくる。しばらくすると、今度は意表をついて後ろから迫ってくる。王子嘉さんは「中国のお化け屋敷にはない怖さがある。

客の反応を見ながら、驚かせ方に工夫を加える。中国にもお化け屋敷はあるが、機械仕掛けが多いという。日本のお化け屋敷はデジタル化にあえて逆行し、

「と興奮気味に話すが、「友達にも勧めたい」と言う笑顔に戻った。「リング」や「呪怨」など日本のホラー映画は中国でもよく知られており、全作を鑑賞した大学四年の郁佳彬さん(こは)に言わせれば、このお化け屋敷は「思ったほど怖くない」とか。入場料は週末の当日券が百元(約千六百元)で、中国のこの手のアトラクションとしては高めの設定だ。

上海上陸 手作り・アナログ感で市場開拓

十人ほどの来場者に「幽霊を信じるか」と聞いてみると、「信じる」と答えた人は一人だけだった。お化けに悲鳴を上げながら、結構みんな冷めている。

手作り感とアナログ感があふれる。オープンから半月で、六百四十人余りがゴールまで到達できずにギブアップした。



上海で開かれている日本のお化け屋敷。休日には待ち時間が1時間以上に及ぶことも。浅井正智撮影

お化け屋敷は六月中旬までの期間限定で、二万人の来場者を見込む。「上海で話題になれば、中国の他の都市からも声をかけてもらえる」と松竹グローバル戦略開発室の三木学さん。ここを足掛かりに中国のお化け屋敷市場の開拓を目指す。

「日本人は、幽霊は恨みつらみなどの因縁があって現れると考えるから、人間と幽霊はウエットな関係。中国人の怪談では、幽霊は因縁の結果ではなく、偶然で不思議な現象だから、逆にドライな関係になる」来場者は、中国とはひと味違うお化けを楽しんでいるようだ。

中国には三六世紀の六朝時代に書かれた「志怪小説」という怪談があり、歴史は古い。ただ地獄絵を研究する愛知教育大の鷹巣純教授は、日中の「お化け観」の違いをこう説明する。